

	<h1 style="font-size: 2em;">別れ</h1> <p>SCE・Net 持田典秋</p>	<p>E-102</p> <p>発行日 2018/2/5</p>
---	---	--------------------------------------

プロローグ

ターニャは、2000年4月カザフスタン生まれのヒマラヤンの雌猫。赴任していた長男が知人から譲り受け飼っていたが、帰国する時に連れて帰ってきた。一時預かりのつもりで我が家に来たものの、様々な事情から我が家の完璧な家族の1員となっていた。¹⁾²⁾³⁾

2013年4月の乳がん疑惑が晴れて以来、これといった病気はせず元気に暮らしていた。爪切りと検診のため、近くの動物病院にはほぼ2か月おきに通っていた。体重はMax4.18kgから3.6kgに減ってはいたが、医師によるとこの位がちょうど良いとのこと。

容貌と品位は、若い時のままとずっと維持してきた。

しかし、年齢とともに病気の影が、静かに忍び寄ってきていた。

始まり

2015年3月いつものように病院で診てもらおうと、血液検査で腎臓に問題があることがわかった。尿毒症にはかかっていないと。体重3.5kg。

4月に病院内の検査で尿にたんぱくが検出され、血液と一緒に検査機関に詳細な検査を依頼した。その結果、比重、蛋白とも規定以内に入っているが、状況として、腎不全が30%程度は進行している様子。早速食事は腎臓対策のドライフード（腎臓サポート）に変えた。

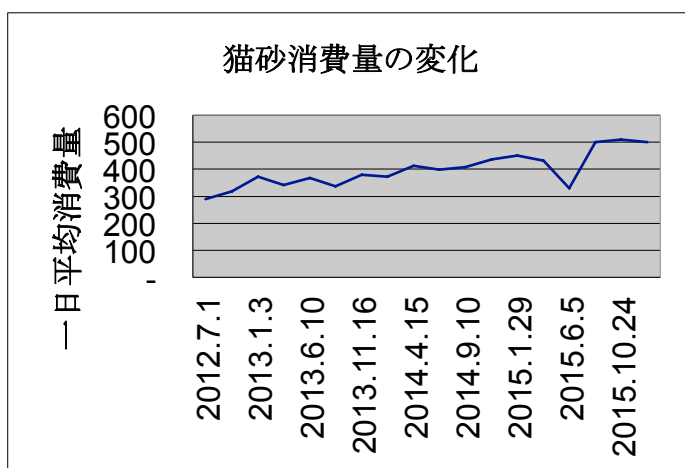
しばらくこのまま様子を見ながら続けていたが、8月始めには体重3.22kgとなった。腎臓サポートを好まないのので、従来のドライフードと混ぜながら食べさせた。「腎臓の治療法は、食事療法が唯一なので、腎臓サポートをできるだけ食べさせて欲しい」と。

8月中旬、尿検査サンプルを持参して検査。院内の簡易検査では、前回よりやや尿が薄くなっているが、ほとんど変わりはない。何故かこの時期の猫砂消費量は減っている。

外部の検査結果では、尿中蛋白はむしろ下がっている。尿の比重は下がっているのは水分が多く薄くなっているため。評価は尿中蛋白とクレアチニンの比で比較する。

10月末、体重は3.1kgに減った。

医師に「尿の量がわかると腎臓の具合の経過がわかる」と言われ、思いついたのが、猫砂の消費量から尿の量を相対的に判断する方法（上図）。毎回インターネットで注文している猫砂（いつも同じ銘柄 7L）入りを4袋）の注文日を調べ、その間の日数から1日当たりの消費量(mL/d)を算出した。



図で見ると、消費量は2015年の夏ごろ一旦少なくなっているものの、全体の傾向は明らかに増加している。

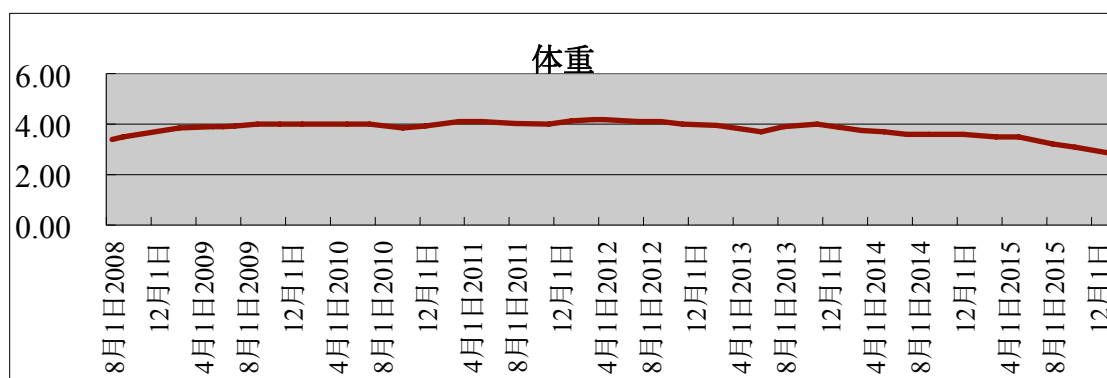
進行

年が明け2016年1月、体重は2.86kgと減ってきた。検査結果では、前年3月に比べ尿中窒素とクレアチニンの数値が高くなっている。尿中窒素はタンパク質が消化できないもの、クレアチニンは体の各部分の老廃物のかけらが集まったもの。腎臓サポートのドライフードは、タンパク質を低めに抑えている。無機リンは参考値以内であるが、ヘマトクリットは血液中の赤血球の割合で、これが下がるとヘモグロビンが下がる。副甲状腺機能、腎障害の指標である。「無機リン、尿素窒素の吸収に役立つサンプル2種類を出すので、食べ物にふりかけて食べさせると良い」と。食欲不振については、胃薬を与えることにした。

2月初めころから、更に食欲がなくなり、ドライフードはほとんど食べなくなった。ササミだけはなんとか食べていたが、大好きだったチーズペーストも食べない。かろうじてビタミンペーストだけは食べていたが、そのうちペーストは食べなくなった。水はたくさん飲み、大量のおしっこをしていた。大量のおしっこは、体の中の毒素を流し出すため。

ターニャはそんな状況なのに、台所に行ってはシンクに登って入りたがるので、台所の襖を締め切りにしていたが、それでも異常に台所に入りたがり、ある日襖の端に爪を立てて開けて入ってしまった。シンクに入り込むことが目的だと分かったので、シンクに蓋を取り付け、シンクの中に入れなくしたが、やはり蓋の上には登ってくる。蓋の上で落ち着いていて、食事したり皿から水を呑んだりする。それでも水は洗面所で流れる水を飲みたがる。上手く飲めないのでスプーンで受けて飲ませたが、満足には飲めない。

それまで、トイレ以外で粗相をしたことのなかったターニャが、おしっこを玄関のたたきにするようになった。ほとんどトイレには入らない。



終局

3月1日、体重は2.1kgまで下がった。脱水症状を起こし、血液検査では、総蛋白も多く、尿中窒素は病院の検査計では振りきれている。クレアチニンも高く、Ca, P も高い。検査結果を見て皮下点滴を行い、この後、点滴はしばらく毎日あるいは1日おきに続けた。病名は慢性的腎不全で、人間ならばとっくに人工透析を受けているような状態。

点滴の効果で、食欲も多少出てはいるものの、量にはむらがあり、体調は点滴で維持しないと弱るような状況。「夏が超えられるだろうか」の質問に、医師は「まだ半年あるので

何とも言えないが、犬ならば完全にもたない」と。この状態で、身体に苦痛を感じるのか聞いたところ、「猫は別に痛くも苦しくも感じない」とのこと。

そんな状況がしばらく続き、体調は一進一退。元気も食欲もある日もあったが、3月末の血液検査では、腎臓の数値は3月始めに比べ改善されていたものの、赤血球の数が少なく、貧血気味。「それが動きを少なくしている原因かもしれない。心臓も弱って血液の流れが少なくなっているようだ。貧血を抑える注射をしたらどうか。最初は週3回、その後は週1回位」

検査結果と医師の提案を受けて、長男とスカイプで相談し、今でさえターニャが治療を嫌がっているし、これ以上苦痛を与えたくないのも、延命のための治療はやめてもらうことに。早速医師に相談に行った。医師は、「今の状況で点滴は延命ではない。食べられなくなった時に施すのが延命と理解している。心臓が弱って血液めぐりも悪くなっているようだが、それによって痛いとか苦しいということはない」と。話し合いの結果、注射は止め点滴は1日おきにし、食欲の状況を見ることに。

病院から帰ったらターニャは二階に上がり、妻のベッドのど真ん中でずやすや寝ていた。2階まで登ったのは10日振り位。その後洗面所に登り、水道水を直に飲む。これも1週間振り位。元気に振舞う。まるで人の話すことがすべて分かっているかのように。

体調が良いので、点滴は1日おきか2日おきにし、脱水症状はほとんど回復した。ただ、足の具合が悪いのか、ちょっと引きずる仕草をしたので診てもらったら、腿の筋肉が衰えているが、骨折などはしていない。

4月になり、口の顎に近いところが化膿していることがわかった。膿をほとんど出す。歯槽膿漏で、その後化膿が進んでいるので化膿止めは打ったが、ターニャは飲み薬を拒否。

朝大小を廊下にした。この対策に関し相談したところ、医師は「おむつは勧められない。猫は自分で外してしまう。着けていても取り替え時期がわからない。私なら囲って行動を制限する」と。それを受け、3㎡程の廊下をターニャ専用にして囲い、シートを敷き詰めて住みやすくした。

7日、点滴は止める。「食べて元気なら良い。口の方は顎の方に穴があき、膿が出てしまっているが、これはこのままが良い。通常は切開して膿を出すことをやっている」と。

9日朝、突然不自由な足を引きずりながら、2階まで囲いを抜けだし登ってきた。抱っこすると、静かにおとなしくしている。何をねだるわけでもない。「まだ家族と一緒にいたい」という気持ちがわかるとたまらない。

12日、後ろ足が太く見えるのはむくみのため。こうなると腎臓ばかりか、心臓までダメージを受けているかもしれない。しかし、医師は我が家の考えで、過剰な治療を希望しないと分かっているので見守る。

しばらくの間は朝夕ドライフードを30g近く食べて食欲もあり、水もよく飲み、大小もコンスタントに出て、元気だったが、21日から食べなくなった。その前日は、チーズペーパストを舐めたほどだったのに。

24日、ドライフードは食べていない。缶詰もちょっと舐めただけ。ペーストも食べない。夕方、元気が無いので病院に連れて行こうかとも考えたが、混んでいる時間帯なので、待たされて返ってターニャに負担がかかると思い行かなかった。

別れ

4月25日夜中の1時半頃、気になって階下に降りて行ったら、ターニャが水の皿の前で寝転んでいたのので、抱き起こした。しかし、息はしているものの意識はすでにない。呼びかけの声にかすかに反応、シャッター音には強く反応し、時々ビクビクと痙攣を起こしていた。それが止んで息もしなくなった。6時、抱いていたひざのズボンに、おしっこ。体中の力がすべて抜けてしまったせいであろう。尻尾を振る得意の「バイバイ」のポーズもしないで逝ってしまった。妻は涙ながらに「ターニャは、虹の橋を渡って行ってしまった」

ターニャ、享年16歳、人間の年齢に換算すると80歳に相当する。

この日は長男がUAEから帰国する日であった。数日前、鎌倉の鶴岡八幡宮にお参りして、「ターニャは長男が帰ってくるまで、何とか生かしておいて下さい」とお願いしていた。ターニャもそれを感じて、25日まで何とか命を長らえていたのだろうが、ままたらずついに力尽きた時は、長男が機上においてまだ日本に着く前だった。ターニャも、生まれてすぐから可愛がってくれていた長男の帰国を、待ち侘びていたであろう、と思うと切ない。

4月27日ターニャの亡骸は、段ボールに絵柄のついた紙で飾って棺を作り妻、長男と車で戸塚斎場に向かった。一時間ばかり待たされたであろうか。ターニャは真っ白いきれいなお骨になっていた。頭蓋骨もまったく崩れずそのままの形を保っていた。

家に帰り、仏壇の隣に台をしつらえ、骨壺に入れたお骨を置き、ターニャの大好きだったささみとチーズペーストや、エルメスの首輪などいくつかの思い出の品、何枚かの写真とともに祀った。花を飾り、ターニャのおもちゃとして1番好きだった猫じゃらしの穂も一緒に。

エピローグ

冬になると我が家では炬燵を入れる。去年の冬、最初炬燵に入ると何か物足りなく変に感じた。すぐにその訳が分かった。ターニャは、炬燵が用意されると必ずやってきて、炬燵カバーの私の胡坐の上で、じっと大人しく同じ向きに寝ているのが常だった。私はその静かな重みを膝に受けながら、座っていたものだった。ますますターニャが思い出され、グッと来た。

2017年4月には25日の一周忌に向けて、鎌倉の三十三観音巡りをした。毎日家から徒歩で出発し、延べ5日程かけて札所の番号順に33か所すべての寺から、御朱印をいただいてきた。ターニャが、あの世で観音様に可愛がってもらえるように、と念じながら。

ターニャの祭壇には、6月から11月ごろまでずっと猫じゃらしを飾っている。猫じゃらしは、1週間も経つと穂から小さな実の粒が散ってくる。そのころまた次の新しい猫じゃらしを採って供える。猫じゃらしは冬には枯れてなくなるので、12月初めにシーズン最後を締めくくるため、あちこち探しながら10本ほど集めてきて、ターニャに「これが今年最後だよ」と語りかけながら飾った。それが年が改まり、飾ってから2か月经つのに、どういふ訳か猫じゃらしは青い穂のまま全く枯れず、実も散らしていない。ターニャの霊の計らいなのだろうか、私達の気持ちがターニャに通じているのだろうか。

妻は、未だにターニャの動画を見るできない。

【参考】1) SCE・Netの窓 猫の利き腕 2) ラング・ド・シャ 3) 猫の命